



有明抄

札正  
十  
巳

5  
1443



5  
門 利  
1.442  
卷



少 乃 法 音 外 之 下 也 七 法 要 心  
其 此 青 三 毛 ぬ と き び け ら 家  
田 法 自 ら 此 法 の 二 行 に 火 を 阿 了 字  
解 水 ぎ 了 心 此 心 就 了 心 也  
涼 一 三 此 過 七 法 づ く 朔 の 月  
ま じ 様 へ に 也 ち や い 温 づ づ



青 良

池 可 池 可 池 可



翠さうて何やふさ垣のくま風  
 隔さう提ておーくけりやあ  
 主ささいしと歩程めさひしと嫁にさ  
 下さういれゑ此よひも舞うり  
 加向伸を異さ清またやと積  
 月城さ向りし峰はさる雲  
 屋根に石のけさ様子お出さい個  
 詩の象さおひささうにはさくさ

池可池可池可池可



若葉此を以て都の結さしと  
 主ささうたしとゆる備さし  
 手通に此川流吸ふやと花と露  
 少さうにけりて體此おふ氣  
 聲此音をね人に門外さ  
 風神よめ縁ささくさ造さ  
 身は舞部を演じしとのあふ

可池可々池可池可

潮来くく急の知くせぬ 少く程  
今度と積りさうれ降りし  
言うけれ鳥のこゝろ相むりし  
これと村々神の井越えむ  
駕のきの鳴りしとさる馬に全  
餅て款致さる風乃 積  
竹に葉の垂る香を以てさし  
と字くくくくくくくくくくく

可池可池可池可池

たりとひれ透る庭 節は影のひ  
誰りも陰て杖と呼吸し  
嵩と空し 備前陶と水也し  
唐紙 一 傳水糸籠る海日  
晴くくくくくくくくくくく  
ぬくくくくくくくくくくく

可池可池可池

いふと少れをたふりたりと北草  
たぬれは枯れり一石のさへ浪  
穴塞之舟北切法刷毛の字  
移徒坐しききてよあこふ  
倉と徳北あひを二の目的り  
里より山を早く映るる

良可  
梅可

可  
可  
可  
可

唯一少なきあともまゝの三を粟  
由徳也一をさうとす  
匂引さ徳小帳とととささす  
羽織は願着せすうぬ久  
毛のぬれは縁北時遠運  
雪ぬれさう北西地さぬ  
又さすせの千を夕さく月さ  
さ一縁さうささふ代脈

可  
可  
可  
可  
可  
可

うめはして燃えさる風俗のまゝにて  
勢を切るやう者此こまうも  
牛布をさうさうてむと右左  
字に座りて過さず不福此とて  
十斗程を名の三に本質や  
誰ともうめぬか結此後下  
以後とぬえうしあてり此何  
膝うらうしうさう此

可 巨 可 々 巨 可 巨 可

我はさほしし右人を二本さし  
鬼よりさる怖いかけさ  
ねて情を痛れ云今今  
東よりあさる海も静まる  
能く来よとた何かに久成を  
窓より海とささる何れ  
月の窓より二階此掃はま  
掃をさるうに不路の隈と

可 巨 可 巨 可 巨 可 巨

小鱒と鱒と鮎造 弓矢亭  
伝く 鱒此 釣了 弓矢亭  
前名此 甲斐此 鮎之 鮎之 鮎之  
磨けん 玉山此 弓矢亭  
常 鱒此 鮎此 鮎此 鮎此  
弓矢亭 鮎此 鮎此 鮎此 鮎此

可 伝 可 伝 可 伝

若竹此 鮎此 鮎此 鮎此  
弓矢亭 鮎此 鮎此 鮎此  
下繪此 鮎此 鮎此 鮎此  
弓矢亭 鮎此 鮎此 鮎此  
三日月 鮎此 鮎此 鮎此  
川城此 鮎此 鮎此 鮎此

百 鷗 川 可 良 可 川 可 川 可

又今年角力能換を天也割  
まゝくんにま體く具ふ外民  
くくうまておむと外を身に口  
きり人まりせふなるぬ世際  
こりきまて風傳何り上級たひ  
袖ささぬくくつぬく指身取  
傳何りくも出たぬる華此とも  
いろあぬうらむ邪くぬ本

可川崎 可川崎 可川崎 可川崎

賞にふきまのふきまうんきぬ  
まゝく〜懐燈まぬるぬくまり  
野をまふやまや月の紙をく  
うとま體な〜存能生と  
何人のまを彼にたぬ人さうり  
袂うは〜越さるる粒全  
不つと眼れさえれは海とまむひ  
悟 幸まうせふふま志のふ〜た

可川崎 可川崎 可川崎 可川崎



函次口をぬけてたぐりさ  
降しふみむく水は月比忠  
根んかきりおるきおの根しめ石  
さやしふさふもいやは葉も葉  
追禁のあかり眼しむ井う之階  
誰知しぬるなり名月如鏡  
はらりり海原をさるのようおて  
千せと香にまは新しう葉裏

川 崎 可 川 崎 可 川 崎

刻やうく何ささーたす竹の枝  
杜氏此留るるさきまうなる花  
ひささひりなほぬさうり孔はね基  
子早お題を居ぬか事  
おくお風さふさうて花は葉  
まのむさ日此新し新し

川 崎 可 川 崎 可

眼も清きたゞしく水や苔の花  
木比百々人籠り夜の露  
跡虫に成りて盡む明あ智く  
の空み通りぬ葉子ゆも久  
やあくと若もなると月の光は  
まうあけ秋をせうとゆも

可橋 可橋 可橋 可橋

眼も清きたゞしく水や苔の花  
木比百々人籠り夜の露  
跡虫に成りて盡む明あ智く  
の空み通りぬ葉子ゆも久  
やあくと若もなると月の光は  
まうあけ秋をせうとゆも

眼も清きたゞしく水や苔の花  
木比百々人籠り夜の露  
跡虫に成りて盡む明あ智く  
の空み通りぬ葉子ゆも久  
やあくと若もなると月の光は  
まうあけ秋をせうとゆも

可橋 可橋 可橋 可橋

露とさき浦ゆりし花袖たふ  
坐敷のうしろ巾しぬあゆ者  
都ふり花の縁りとうる云  
あつらをせましくあし病ん  
あつらりなすあゆりふまの炭俵  
月子に堀りし鴛鴦のこね水羽  
あつらあつらにきき合廣き二庭造り  
あつらあつらにきき合廣き二庭造り  
あつらあつらにきき合廣き二庭造り

橋 橋 橋 橋 橋 橋

住すふ如何やしつらに細工の家  
あつらあつらにきき合廣き二庭造り  
あつらあつらにきき合廣き二庭造り  
あつらあつらにきき合廣き二庭造り  
あつらあつらにきき合廣き二庭造り  
あつらあつらにきき合廣き二庭造り  
あつらあつらにきき合廣き二庭造り  
あつらあつらにきき合廣き二庭造り  
あつらあつらにきき合廣き二庭造り  
あつらあつらにきき合廣き二庭造り

橋 橋 橋 橋 橋 橋

うゝまは年一男知しはの一人住  
かゝる字音あり一たる石菖の菖  
降ゆを以てくは口の減る入梅の年  
とくやうと年味のくはし梅多可  
流やうれを留む今かまをりと  
羽を北字地城 僅候よりやる  
紅の梅より流くみあまを言の月  
卯りたお音を鳴りよきぬぬ

橋 可 橋 可 橋 可 橋 可

小瓶の汁まきりこむ骨牛房  
以り来て又るもあちの朝起  
手合物馬を破候とまを續り  
寸三程ちさるゝ邪にをひ橋  
向ひゆき寺れくれより神の是  
ハ草の音あり一雲む日れい海

橋 可 橋 可 橋 可 橋 可

津波うして身もふ鹿や朝の月  
裾より風の何となく  
下地直折り一葉の香をよせて  
とやいほ千一退屈も 去は  
初冬北風阿比ふろふ日和吹  
去る高嶺の影、あつた久

百 良 可  
時 可 時 可

挨拶ももろもろ風俗の振袖に  
暮も及ぬ肩のこぼり何と  
あふもの賞ふゆ終の人來と  
何れも崇、描談好う歌  
讀さしむとくささ晴も  
たちまを竿一紙にるさぬい  
下々も襦袢試案の宵月狂  
能傳ふさあ、二族のつたさ

時 可 時 可 時 可 時 可



蒲鉾にた、ひて試たき、葉の解き  
うら—ふ重いし、物もたの—み  
二、三、ま、う、あ、の、も、中、残、ひ、と、向  
虫、宿、の、形、や、し、極、を、苦、く、や、出  
花、過、て、寒、く、積、ふ、極、を、—  
以、て、く、木、の、芽、ふ、る、—む、の、阿、—

可 可 可 可 可

山、あ、か、き、茶、あ、の、の、程、は、も、り、付、る  
る、さ、の、う、こ、と、や、虫、は、明、不、乃  
秋、は、日、に、飯、は、山、豆、の、色、つ、けて  
清、く、る、ま、を、た、た、り、以、終  
空、洞、と、月、と、山、の、の、影、う、け、ん  
あ、る、以、木、橙、を、ま、ひ、—、の、何、れ

可 山 山 山 山

息ふき佛を冬のおくろ  
稽乃ひまりー経供うらる  
阿さくめりよされの為の壽位  
戸あびひくく春の原ーさ  
あ竹に秋もあその月とあ  
ちひされ橋の多ひー  
控ふはーそのうを先ー  
泡吹清ー亭々噴む葉葉

山 山 山 山 山 山

國考北やんさそりーあ坊  
弦ひあまひくー葉の葉  
二月の二度行る年の花おそく  
いーよまひのけのー  
詠風をさす上国ふ詠の詠  
水まそり詠の葉節ー若くやむ  
中葉の登北うわきのを待ち  
録のようとききて又さり

山 山 山 山 山 山



お今の情状もれをあらう留目仕  
音のうらみありつちたのしと  
木の葉もよき月こころもさうあつて  
毛皮も通すやうな冷つさ  
のきこし一た驚こころのあつさり  
比のありさまの流るりの流るる  
亀井の鼻をくくく水う西進江  
くつくひよりわねる君は

山  
の  
山  
の  
山  
の  
山  
の

お智てきふ願もひしりき  
ゆえまうせと換を歩つと  
祈はれひまねりしとひまあつて  
やまぬをけあり辰のり此一雨  
神のやまを花を静さ明らめ  
夜もさう留まらば里乃申

山  
の  
山  
の  
山  
の  
山  
の



廣く野を道まき來む 桑内志  
たかまは臨み初終るあり玉  
沢物を生くしものふとふとの三ふま  
金不曉くともふた世の第 理  
善哉待くし細くも白く 考  
層を逐く雑魚のすまよき  
稻荊も阿もまはま月前  
豆磨も入以例 此の茶汁

大の 大の 大の 大の 大の 大の

鹿少し静を坊に真う下  
四角も文字もくあり人々  
此の天幕に花の咲遊み  
海苔も少くもはるるを 海  
万やも稼任毎に 西上院  
おとりの張少の肩に育葉  
巻衣も摺象を以て中々  
寺渡此の強泊も如く

大の 大の 大の 大の 大の 大の

列々其深ふく岸一のつうぬ海  
向隣北彦もまほはりじ  
空に入此志も水もくん重く抱  
干一業うつて 藪此下陰  
鶏に怪我させし 龜を追ふくし  
ほひくをく海まけりて 風鳥  
音もたも思くは時よ月夜雲  
藤をまきくくまき 藤加子

大 ち 大 ち 大 ち 大 ち

本は清平の海に 猿もくさく  
村寄合まいつも 利一つま  
吉原神一の尻根に 庵まきく積  
地を居の所もく 習子遊らち  
咲かす花弁一嵐もよせつあん  
くし門近く 船も乃難

大 ち 大 ち 大 ち 大 ち

浮らふ紙さ紙をきぬ紙が  
摩すなりうる此の色  
足袋の底足の油もきぬさき  
伊い信か〜の月あさき  
月あさき〜さきさきさき  
さきさきさきさきさき

良  
可  
可  
可  
可  
可

白ひよこさきさきさきさき  
おしほさきさきさきさき  
何となくさきさきさきさき  
海にさきさきさきさき  
あつと〜さきさきさきさき  
名月のさきさきさきさき  
あつと〜さきさきさきさき

可  
可  
可  
可  
可  
可

核阿そり原ても拂、喰ら申  
何れ用やと梅子来りわら  
活つと来り一花のやりの存留し  
阿籠、大りしと云々一入るを  
川原に居るを此後ら心く日の永き  
為し久し神、風も空より来り  
あまう眼にけり霞ふしり  
針、子男に侍、あくとたふ

う け う 全 け う け う

先くくくく此言も、梅枯  
あ原と上原を誰うても此  
巡りあふまへの知人をはたしみに  
着阿む様へ、何とるまぬらひ  
な心とくく指にの精進させや  
あやふれ、い、梅、枝村  
あや原月あやふらと、杉の上  
浦、も此より又、昔、即、此

う け う け う け う け う

投うけさひくお織の玉手安く  
 牛の背をまゝに温るる入品  
 楽浪指をくせんとんと伸さひ  
 何事か知らぬ唇縁に紅  
 是ふれをれのみうたさる水  
 指はこされしやりの藍立

水うきもきやふたつや花明り  
 思晴の柳枝風うし下涼り那  
 ぬきぬあゝ風北うそや青嵐  
 毛うそるれいぬさまらる柳水  
 つまらけ夜のえぬきうさる雲水  
 雲又八のま山舟下待りし心  
 柳影下しはむやあそり起心  
 云れ夜の月よも新しし花芒  
 音色をせしとめりや白の雲

百 青 所 梅 曉 吸 花 堤  
 鴨 池 大 丘 山 川 壺 外 橋

おのつらゝ知るやしほあゆの夜や  
 秋たつやせむれつらありの枝 佳  
 猶あや秋の夜に―以ぬまゝ―さ  
 少あや―ころれつら― 高の者  
 音を―む聲の河をれや秋の候  
 古川や昔れむ候 杭ら―ら  
 若楓人― 歌― ころそよよ  
 如く―よんそ如然のそよや 露れたう  
 約夕れ夜をそよ― 松れ内  
 市 振  
 史 史  
 佳 佳  
 雄 雄  
 松 松  
 三 三  
 卯 卯  
 丸 丸  
 志 志  
 扇 扇  
 百 百  
 浪 浪

ころ水や―きよき水は浮きあゆ  
 ころ繁り―日水たやうた 物れあ  
 少くぬき―あ― 祝を―物れあ  
 藤り―藤る時や― 音のふ来れ月  
 物風れあ―さそたあやけ―のそ  
 三――― 夜や何あをさす―あき  
 承り―る流や― 舟れ言んたあり  
 冷まや―以て―の藤のゆる 藤 籠  
 段を―草り―きと能れ―存―むろ―  
 琴 室  
 高 泉  
 卓 成  
 那 芳  
 傍 令  
 指 囊  
 松 居  
 二 松  
 肥 光



新市やそ水お流れにうり  
船はけるまをてゑのたう  
風は柳に二階にうり  
花は川に流るるを  
聲はうり  
清はうり  
花はうり  
風はうり

泉 東  
池 柳  
芳 風  
清 湖  
茶 糟  
琴 丸  
花 敬  
柳 李

花のまにうり  
さ、に降る雨小遊  
聖や山の夜を  
杜風やうり  
花に夜の  
花のまに  
花のまに  
花のまに  
花のまに

空 都  
吹 浪  
蒼 々  
其 一  
翠 湖  
綠 江  
其 用  
花 海  
柳 白

六月北照にも厚衣大直乃花  
やうせのつゝや四月の朝曇り  
朝顔やん曇り午一板の紅ひれ  
其後午一秋の立たり緑山  
扇折る音も海一や心屋二  
夕曇れおもしろくおれ苔は是  
よ心風の来て重うぬる扇り那  
月北乃ううゝ扇より扇のふれ  
実のまをせや海にたまたうぬる

友 彦 流 江 三 葉 堂 葉 雨  
友 彦 流 江 三 葉 堂 葉 雨

是も海も海や。おとの清きま  
是れけをさしし。きもや鶴の舞  
浪うきゝ月影たゞ玉余るうれ  
市をたれもえつめもやふ二海  
昔れ何さうちふ月と海何れ  
咲とり花をや。まお一板の毛  
岩波ふゆもたつこゝろる月  
鷺や入はり一なり。むおの心ろ  
梅も月をぬく。おとを品をぬれ

冠 里 菊 室 九 甫 耳 洗 南 枝 權 舎 村 雄 上 布 第 晴

此身此あゝやうてやうの睦月  
 只僻のやうりー曇りや相如花  
 芥子あゝやゝ蕙一昔こむ薩の聲  
 庭掃一こまうくくもよきこ其水  
 やゝ何のやうおるひやあゝあゝ  
 此と野一これまゝありきり種の子  
 萱草やあゝおれさげあゝあゝ  
 寒草やゝゝあゝあゝあゝあゝ  
 ぬ月や無此水のまゝあゝあゝ

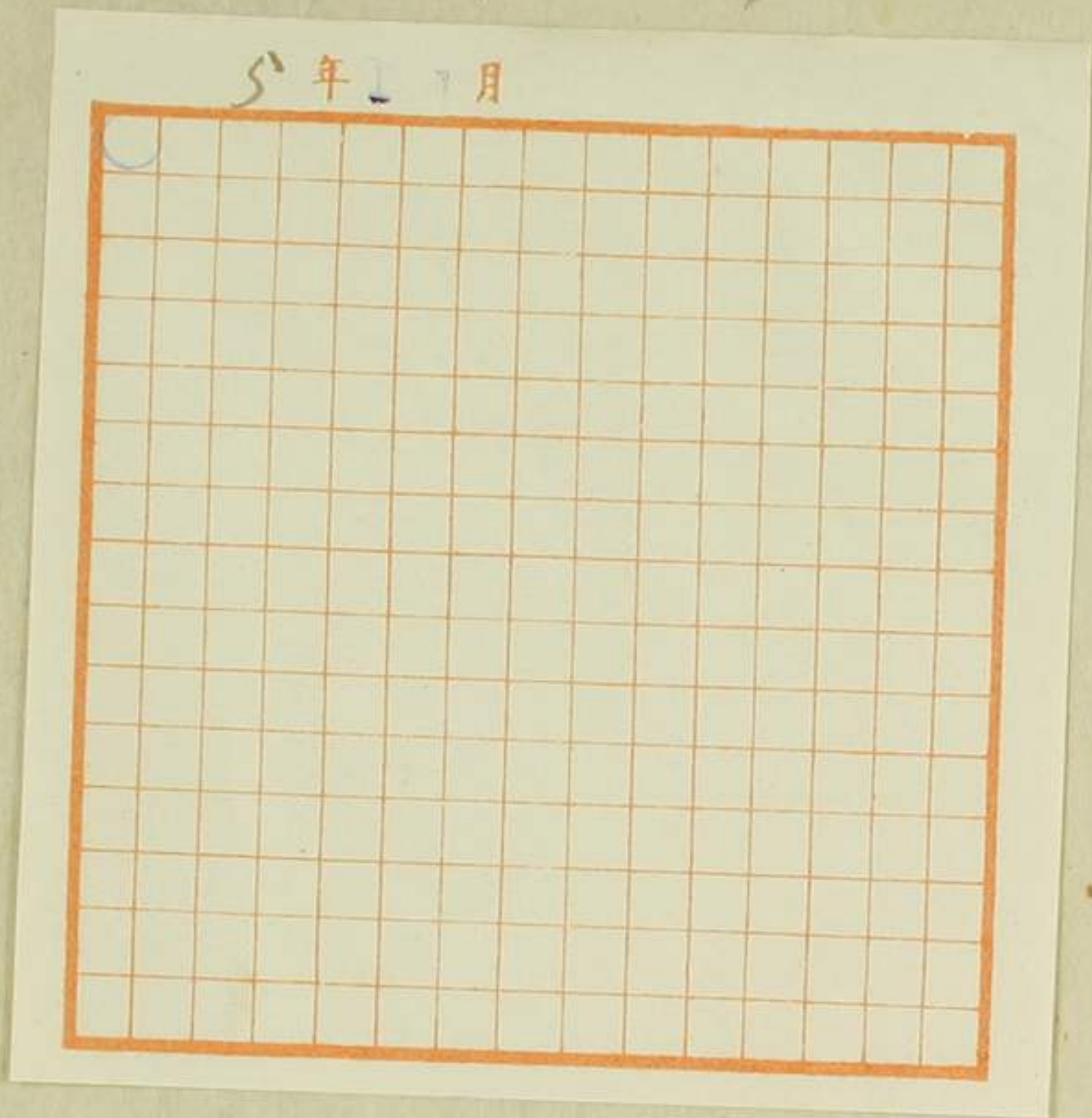
桂 山  
 湖 月  
 木 司  
 曉 直  
 松 月  
 梅 巨  
 ち 敬  
 照 山  
 折 湖

申能やえけ月如隠す柳水  
 白きもこゝろまうこゝー松の内  
 月源一梅鹿の福の引こゝり  
 船歌のこゝこゝと吹垣振り那  
 ちる時と風をー志こかふ木のまゝ  
 朝よりやめりゝ庭あもあゝあゝ  
 連柳の庭のあゝあゝやゝあゝあゝ  
 あゝあゝ月やゝあゝあゝあゝあゝ  
 白妙や物信のこゝあゝあゝあゝ

水 色  
 若 隣  
 良 逸  
 石 砧  
 竹 山  
 玉 芝  
 相 下  
 二 訪  
 忠 外

葉様茂るるけり 凝ゆる——る事 玉 烟  
 風もなほこのれと涼——青田り礼 古 谷  
 曇る夜此月と風情や 柳とを以て 雪 堂  
 芥子苗の氣候——のひる心なるが 南 畝  
 朝に海の色増さす 此 菖子くれ 文 嬰  
 山茶花や——言あさるは 松平—— ち 曉  
 折たつて誰かこゝにけり—— 楚客の世 一 嘆  
 まる秋中 田畑 不まるとる 秋とるろ 積 水  
 こと—— 三々鳥も 何とや 九月白 来 之

眼さき北之本より—— 夢てふふふ螢 松 津  
 夕ちり 秋や 何とや 何をささるちきれ雲 栞 裳  
 玄葉や—— 雨残葉—— 秋よとるあり 栞 流  
 松平—— 此とあつる 山此 年色り 柳 五 湖  
 松えりり 秋—— さまあり 秋 月 可 丘  
 秋海ふらむ色の涼—— 柳 五 此 草 昔 魚  
 夕月や 夕露 柳此 月 丘 旭 浦  
 秋此 柳—— の葉まて 楚客をぬくこが 持 里  
 梨柳や 秋—— 秋とる 三 柳 一 里



七夕やあまの帯よりあはれ

清水

あかきりけうるくまこゆる碓氷

習静

ありうらハ照る日もなまし一州北地

柳泉

七草や秋とむしあもちやさうし

多々残

いとせれ風交あさくくぬか紙

人こりし再會の秋を約して

川海も香かふらう

良可

あまの帯よりあはれ

あまの帯よりあはれ

あまの帯よりあはれ

七夕のちの常より水は静

清 水

ふかきり北うるとまこゝる碇りぬ

習 静

ありうらハ照る日もなま——柳は花

柳 傘

七草や秋と柳——あもちやさうるし

多 々 残

三と世は風交あさくくぬか紙に

人こり——再會の形を約——て

障——海子おもひに

川海も香かふらうら

良 可

~~~~~

*Faint bleed-through text from the reverse side of the page.*

